

『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学歴（2）
—欧米留学者を中心に—

見城 悌治

千葉大学大学院国際学術研究院

An analysis of the Compendium of the Republic of China's
Medical System and Situation (2):
Medical scientists in Modern China and their study abroad destinations,
especially focusing on the United States and Western Europe

KENJO Teiji

要旨

日本の医学関係者が、近隣アジアへの医薬支援を目的として、1902年に設立した団体に「同仁会」がある。1935年に同会が中国の医療事情をまとめ発刊した『中華民国医事綜覧』には、中国の医師・医学者4,773名の名前や履歴が掲載されている。そのうち、海外留学経験者は775名であり、留学先で最も多かったのは日本で500名を数える。またそれ以外の留学生275名においては、アメリカの118名とドイツの100名の2国で8割を占めた。

本稿では、この『中華民国医事綜覧』に見える日本以外の留学先10の国・地域の留学生の名簿を作成し示すとともに、帰国後の職業を整理することにより、中国の医薬関係者が留学経験をどのような形で活かしていったのかを明らかにした。

一方、1930年代において「中国の医薬関係者の中では、日本留学経験者が多数勢力であるのに、欧米留学経験者が持つ影響力が強いのは遺憾」という認識が、日本の医薬学関係者の中に存在していた。その言説の一端を、実際の数値などと照らすことにより、近代中国医学界の内部事情についての検討もおこなった。

キーワード

同仁会、中華民国、医師・医学者、海外留学、日本留学

はじめに

1902年に創設され、アジア（とりわけ中国）に対する医療支援をしてきた日本の医事団体である同仁会が、1935年に、当時の中国における医師、病院、薬局などのデータを収録した『中華民国医事綜覧』なる書物を発刊している⁽¹⁾。筆者は本誌前号（5号）で、同書进行分析し、「『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留學歷—日本留学者を中心に」という拙稿にまとめた⁽²⁾。そこでは、同書に掲載されている4,773名の医師のうち、海外留学経験を持つ人は775名（16%）であることを確認した。またその775名中の日本留学者500名（全留学者中の64.5%）を留学先の大学別の名簿として示し、日本留学者の大まかな特色をまとめた。

本稿はその続編として、日本以外の海外留学者275名の国別／大学別の名簿を作成し、示すことを第一の目的とし、その特質を、日本留学者のそれと比較してみることにする。

一方、民国期の中国では、海外留学の後、母国で職を得た医薬関係者が、「欧米派」と「独日派」（後者はドイツ医学の影響を受けていた「日本派」のこと）の二派に分かれていたとされる。たとえば、日本の医薬関係者が組織した同仁会の雑誌上では、中国医学界で、「独日派」の影響力が低いことを嘆く言説が、しばしば見える。その認識は、どこから生じたのか。この「二派對立」の現状を具体的な数値などから明らかにすることを、本稿の第二の目的としたい。

1 『中華民国医事綜覧』に見る中国人医師の留學先

筆者は『中華民国医事綜覧（以下、綜覧と略）』に見える日本および欧米の留学者の国別・大学別の数値を前号で示した（同書の出版目的などについては、前号の説明（2～6頁）に委ねることとする）。そして、今回欧米留学者の名簿を改めて作成するため、元史料との照合を改めて行ったところ、数値の間違えが、かなりあることに気づいた。以下に、日本留学者500名を除く275名の留學先／および大学別の数値を改めて示すが、前回と数値が異なった箇所については、下線を付しておく（前回の誤った数値については、注記に示し、一部には補足も加えている）。

【アメリカ 118名】（15.2%：海外留学者775名中の比率。以下同じ）

ペンシルベニア大学（以下、「大学」は略す。他の国々もそれに倣う）20、ハーバード19、ミシガン14⁽³⁾、ジョン・ホプキンス12、シカゴ11、セントルイス6、カンザス4、ノースウェスタン4、ワシントン2、コロンビア2、シラキュース2、ウェスタン・リザーブ2、ミネソタ1、バージニア1、ジョージワシントン1、コーネル1、イリノイ1、イエール1、ヴァンダービルト1、オハイオ1、カリフォルニア1、マーケット1、ボストン1、ジェファーソン1、ニューヨーク1、シンシナティ1、スタンフォード1、テネシー1、

不明4名⁽⁴⁾。

【ドイツ 100名】 (12.9%)

ベルリン56、フライブルク8、ハイデルベルク7、ゲッチンゲン6、ハンブルク6、フランクフルト4、ミュンヘン4、ヴュルツブルク3、チュービンゲン2、ロストック2、不明2⁽⁵⁾。

【フランス 21名】 (2.7%)

パリ7、ボルドー6、リヨン4、ストラスブール2、モンペリエ1、ランス1⁽⁶⁾。

【イギリス 20名】 (2.6%)

エジンバラ8、ケンブリッジ4、コロンビア3、グラスゴー2、ロンドン1、インペリア1、不明2名⁽⁷⁾。

【オーストリア 5名】 (0.6%)

ウィーン5。

【ニュージーランド (英連邦) 3名】⁽⁸⁾ (0.4%)

カンタベリー3。

【カナダ (英連邦) 1名】⁽⁹⁾ (0.1%)

ブリティッシュコロンビア 1。

【スイス 1名】 (0.1%)

ベルン1。

【イタリア 1名】⁽¹⁰⁾ (0.1%)

大学名不明。

【安南／印度支那 3名】 (0.4%)

ハノイ大学1、不明2。

これらによれば、日本留学者 (500名) 以外の275名の留学先は、アメリカ118名 (中国医薬学留学者全体の15.2%)、次いでドイツ100名 (12.9%) が上位を占めた。以下、フランス、イギリスが20名前後で並ぶが、欧米方面の留学先としては、アメリカとドイツが主流であったことが分かる。

以下で、国別／大学別の具体的な名簿を示すが、左から各々の通し番号、また『総覧』上の分類分けであるところの「姓名」、「別号」、「籍貫 (出身省)」、「住所・診療所」に従って項目を作った。その次に「備考」を置き、女性、中国での医学校履歴、博士号、他国への留学経験などの特徴を加えた。最後に、『総覧』での掲載頁を加えている。なお「住所・診療所」欄については、勤務あるいは経営する医院や薬局の名前のみを拾い、実際の住所は割愛している。

さらに一覧の最末尾には、少数であるが「※」印を付し、数字を記入している。筆者は以前、同仁会発行の中国語版雑誌『同仁会医学雑誌』に収められていた「中華民國医界名士録 (以下「名士録」と略)」に載った106名の特徴をまとめたことがある⁽¹¹⁾。そこに取

り上げられた人物が、『綜覧』にも含まれているのかを検討するため、これを加えた。「※」に入れた数字は、その旧稿で作成した一覧表の通し番号である。本件に関する言及は、「おわりに」で行ないたい。

表1 欧米留学者（国別／大学別）一覧

【アメリカ 118名】

1、ペンシルベニア大学（20名）

	名前	別号	出身省	住所、診療所	備考（女性、中国での医学校履歴、博士号、他国への留学経験）	掲載頁	※
1	王以敬		江蘇	上海・同仁医院	聖約翰大学医学院	147	
2	甘徳明				聖約翰大学医学院	162	
3	江清			済南齊魯大学教務主任	医学博士	173	
4	呉興業		河北	上海友邦人壽保險公司		180	
5	李清茂		広東		同済大学医学院	192	
6	李広助		浙江	蘇州博習医院		196	
7	林樹模		湖北	北平協和医学院副教	聖約翰大学医学院	225	
8	姚爾昌					235	
9	柏錫熙			北平道済医院	女性	239	
10	徐乃禮	翰飛	江蘇		聖約翰大学医学院	256	
11	徐逸民		広東	上海同仁医院	聖約翰大学医学院	256	
12	張福星			上海同仁医院	聖約翰大学医学院	274	
13	張信培	樹聲	浙江	杭州保慶医院		277	
14	陳邦典				聖約翰大学医学院	297	
15	陳景煦			上海郵物管理局医務処	聖約翰大学医学院	299	
16	陳慕貞			上海紅十字会医院		300	
17	曾定夫	憲武	湖北	武昌同仁医院		320	
18	盧馬慕潔					378	
19	駱伝栄			上海医院長		383	
20	蘇言真		広東	北平協和医学院助教	聖約翰大学医学院	401	

2、ハーバード大学 (19名)

1	林文秉		浙江	北平協和医学院副教		225	
2	金铸		江蘇	北平協和医学院副教		232	
3	牛惠生		江蘇	上海骨科医院院長、利濟藥房、中華医学会長	医学博士	146	10
4	江上峯		福建	上海聖約翰大学教授	聖約翰大学医学院	172	
5	呉紀舜	希農	広東	中国療養院		180	
6	呉旭丹					181	
7	胡正詳		江蘇	北平協和医学院助教授		244	
8	祝愼之					262	
9	陳輝		浙江	南京陸軍軍医学校	北洋医学堂 (既に廃止)	301	56
10	陳宗賢		湖北	北平中央防疫処長	聖約翰大学医学院、医学博士	306	86
11	高鏡朗			国立上海医学院小児科教授。上海紅十字会総医院	湘雅医学院	267	
12	張維			上海国立上海医学院	湘雅医学院	274	
13	富文寿		浙江			317	
14	劉瑞恒	月如	河北	南京内政部衛生署長	北洋医学堂 (既に廃止)、医学博士	359	1
15	楽文照		浙江	上海紅十字会総医院		366	
16	蔣士燾			南京中央軍官学校軍医処		371	
17	黎宗堯		広東		北洋医学堂 (既に廃止)	377	
18	謝志光		広東	北平協和医学院代理主任助教授	湘雅医学院	386	
19	謝元甫		広東	北平協和医学院教授	医学博士	386	24

3、ミシガン大学 (14名)

1	丁懋英		江蘇	天津公立婦女医院	女性	140	
2	石美玉		湖北	上海伯特利医院、分診所	女性	163	
3	任倬		江蘇			165	
4	李清濂			上海広仁医院	女性	194	
5	姜愛蘭		山東			236	

『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留學歷（2）—欧米留学者を中心に—

6	倪章祺	維城	浙江	北平協和医学院	浙江医薬専科学校	248	
7	康愛徳			江西南昌医院		271	
8	章景葆	冕南	江蘇	南京鼓樓医院	南洋医学院	290	
9	陳李清濂		広東	上海広仁医院	女性	301	
10	湯兆豊	書年	浙江	上海華英薬房		321	
11	董承琅		浙江	北平協和医学院副教		347	
12	鄒邦元		江西	南京東南医院	女性	349	
13	劉劍秋		江蘇	上海人和医院		357	
14	戴思瑞		広東	広州光華医学校教務長		392	

4、ジョンボプキンス大学（12名）

1	全紹清		河北		北洋医学堂（既に廃止）、 医学博士	165	5
2	林世熙		広東			223	
3	胡宣明		福建	鉄路部衛生処長	医学博士	241	83
4	胡鴻基	叔威	江蘇	上海市衛生局長	北平大学医学院	241	7
5	倪葆春		浙江	上海女子医学院		247	
6	孫克基		湖南			252	
7	桂質良			武昌同仁医院		261	
8	陳希佐			廈門陳天恩医局		308	
9	鄧松年			河北海港検疫所長		373	
10	応元岳		浙江	国立上海医学院教授	湘雅医学院	383	
11	戴芳淵			武漢海港検疫所長		391	
12	丁求真	任生	浙江	西湖療養院院長、浙江医 専教授	同済大学医学院、千葉医 科大学にも留学	140	

5、シカゴ大学（11名）

1	王素貞			上海滬江大学		149	
2	孟繼懋		河北	北平協和医学院助教		220	
3	張錫鈞		河北	北平協和医学院副教		280	
4	梅貽琳		河北	軍政部陸軍署軍医司長	医学博士	290	103

5	郭尚賢					296	
6	陳俊懷		広東	上海紅十字会医院		300	
7	湯銘新			浙江湖州福音医院		321	
8	黄子方		福建	上海衛生処長		331	39
9	頼斗岩		福建	上海医学院		380	
10	鍾望新					388	
11	関頌韜		広東	北平協和医学院助教授		399	

6、セントルイス大学 (6名)

1	王光宇	子玕	江西	長沙湘雅医学院院長	医学博士	153	
2	許鳴韶					293	
3	李復生					193	
4	胡潤德					241	
5	胡克	子美	江蘇			242	
6	胡伝揆		湖北	北平協和医学院助教	北平協和医学院	244	

7、カンザス大学 (4名)

1	毛克倫		広東			146	
2	施聖韜					237	
3	高祖霖		福建			267	
4	楊宝衍					338	

8、ノースウェスタン大学 (4名)

1	紀長庚			国立上海医学院。上海紅十字会総医院		241	
2	陳繼堯	達明	広東			299	
3	趙蘇権		広東	広州夏葛医学院教授、広州柔濟医院		356	
4	禰有恒					397	

9、ワシントン大学 (2名)

1	呉金聲					187	
---	-----	--	--	--	--	-----	--

『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留學歷（2）—欧米留学者を中心に—

2	李岡	子雲	浙江			192	
---	----	----	----	--	--	-----	--

10、コロンビア大学（2名）

1	朱世英		河北		北洋医学堂（既に廃止）	171	
2	梅卓生					289	

11、シラキュース大学（2名）

1	李学義		福建	福州協和医院		202	
2	錢建初		江蘇	上海医院		380	

13、ウェスタン・リザーブ大学（2名）

1	沈克非		浙江	南京中央医院副院長		210	
2	沈雋淇		河北	北平協和医学院副教授		211	

14、ミネソタ大学（1名）

1	蔣鵬		浙江	長沙湘雅医学院教授		371	
---	----	--	----	-----------	--	-----	--

15、バージニア大学（1名）

1	周明玉		浙江			217	
---	-----	--	----	--	--	-----	--

16、ジョージワシントン大学（1名）

1	張西銘			上海医院。眼耳鼻科。		273	
---	-----	--	--	------------	--	-----	--

17、コーネル大学（1名）

1	鄺翠娥		広東			394	
---	-----	--	----	--	--	-----	--

18、イリノイ大学（1名）

1	林惠貞		福建	上海利濟薬房		223	
---	-----	--	----	--------	--	-----	--

19、イエール大学（1名）

1	顏福慶			上海国立上海医学院長、 上海紅十字会総医院長	聖約翰大学医学院	395	
---	-----	--	--	---------------------------	----------	-----	--

20、ヴァンダービルト大学 (1名)

1	李天爵					202	
---	-----	--	--	--	--	-----	--

21、オハイオ大学 (1名)

1	陳仲虎		広東			297	
---	-----	--	----	--	--	-----	--

22、カリフォルニア大学 (1名)

1	劉尊植			上海集成薬房		358	
---	-----	--	--	--------	--	-----	--

23、マーケット大学 (1名)

1	潘連奎					367	
---	-----	--	--	--	--	-----	--

24、ボストン大学 (1名)

1	梁琴鵬		広東	浙江金華福音医院		287	
---	-----	--	----	----------	--	-----	--

25、ジェファーソン大学 (1名)

1	陸錦文	景星	江蘇			313	
---	-----	----	----	--	--	-----	--

25、ニューヨーク大学 (1名)

1	李廷安			上海市衛生局長。北平協和医学院助教授	北平協和医学院	194	
---	-----	--	--	--------------------	---------	-----	--

26、シンシナティ大学 (1名)

1	黄孟虞			南京慕慈医院	女性、江蘇医学専門学校	331	
---	-----	--	--	--------	-------------	-----	--

27、スタンフォード大学 (1名)

1	鍾淑貞					388	
---	-----	--	--	--	--	-----	--

28、テネシー大学 (1名)

1	李奉藻		広東			204	
---	-----	--	----	--	--	-----	--

29、大学名不明 (4名)

1	周達	仲衡	安徽	上海同仁医院		214	
2	許允					292	

3	劉秉信			広東平州医社		365	
4	鄭豪		広東	広東光華医学院長		376	

【ドイツ 100名】

1、ベルリン大学（56名）

	名前	別号	出身省	住所、診療所	備考（女性、中国での医学校履歴、博士号、他国への留学経験）	掲載頁	※
1	孔錫鵬	伯翼	広東	上海集成薬房	同済大学医学院	142	
2	毛羽鴻	質賓	奉天	天津医院長	北平大学医学院	146	
3	毛咸	子正	浙江	広西省立梧州医院	北平大学医学院	146	
4	王宗汾	景陽	浙江	上海急救時疫医院医務主任、上海劳工医院副院長	同済大学医学院	147	
5	王復達	畿道	江蘇	蘇州畿道医院		150	
6	王味根	徳滋	浙江		同済大学医学院	152	
7	王福滙	注東	山東	山東省立医專教授	同済大学医学院	157	11
8	江逢治	磐安	広東		同済大学医学院	172	
9	呉百熙		江蘇			180	
10	呉不熙					181	
11	李傑					192	
12	李中庸					193	
13	李宣果	念一	福建			200	
14	李坡	歩峰	河北	天津歩峰医院	直隸公立医学専門学校	200	
15	李允恪		山西	北寧鉄路天津医院	北平大学医学院	201	100
16	李学禹	文軒	山東	河北省立医学院附属医院外科	浙江省立医薬専科学校、医学博士	201	
17	汪元臣	善福	江蘇	江蘇省立医院長		207	101
18	汪黄英		江蘇	鎮江省立医院		207	
19	沈發儉	子廉	山東	済南山東医專教授	医学博士	211	
20	周瑞廷			済南山東医專教授	医学博士	219	
21	林椿年		福建	広東中山大学医学院	北平大学医学院	227	

22	胡哲揆	禹卿	浙江	東南醫學院教授	浙江醫藥專科學校、醫學博士	241	
23	胡贊	定安	浙江	南京市衛生局長	浙江醫藥專科學校、醫學博士	242	
24	胡嘉訓	彝伯	江西	南京民生醫院		242	
25	凌翼支		江蘇	上海東南醫學院教授	醫學博士	248	
26	唐仁縉		江蘇			249	
27	孫明義		河北	天津明義醫院		254	
28	祝紹煌	星槎	浙江		浙江醫藥專科學校、醫學博士	262	
29	馬俊和			天津北寧鐵路醫院	北平大學醫學院	266	
30	高禛瑛	漢符	山東	河北省立醫學院附屬醫院 長	同濟大學醫學院、醫學博士	268	
31	張近瑄					273	
32	張杏初		江蘇		同德醫學院	274	
33	許軾民	陳琦	浙江	四川弘仁藥房		294	
34	陳錫爵			河北省立醫學院		307	
35	陳元善			廣州陸海通藥行		310	
36	屠開元		浙江			317	
37	曾志民					320	
38	項經方					327	
39	馮五昌	孟卿	浙江		同濟大學醫學院	327	
40	黃城	庸于	福建		同德醫學院	330	
41	黃希明		浙江	上海東南醫學院教授	醫學博士	330	
42	楊立任		吉林	南通學院教授	女性、南洋醫學院	339	
43	劉緒粹	庶樵	四川			359	
44	蔡適存		江蘇	上海東南醫學院教授	同濟大學醫學院、醫學博士	369	
45	盧寶法		廣東		同濟大學醫學院	378	
46	盧致德			北平協和醫學院	華西協和大學醫學院	378	
47	謝其綱		浙江	上海南洋藥房		385	

『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留學歷（２）—欧米留学者を中心に—

48	韓明炬	明炬		漢口武昌医院		389	
49	瞿立衡		江蘇	江蘇南通学院医科長	南通学院医科	390	
50	鄺慈悲			広州鄺磐石留医院	中山大学医学院	394	
51	譚守仁		四川		北平大学医学院	398	
52	江聖鈞	秉甫	浙江	浙江医專教授。附属医院 内科主任	大阪帝大にも留学	172	12
53	朱其輝	内光	浙江	浙江医專校長	医学博士、千葉医科大学 にも留学	170	28
54	呉濟時	谷宜	江蘇		京都帝大にも留学	183	18
55	馮啓亜		江蘇	天津啓亜医院	女性、東京女子医学専門 学校にも留学	329	
56	鄺麗深		広東	広州鄺磐石留医院	女性、東京帝大にも留学	394	

2、フライブルク大学（8名）

1	余鴻康		広東	広東光華医学院外科主任		179	
2	李元善	景章	浙江			192	
3	李星鎔		江蘇			193	
4	沈謙	汝兼	浙江	上海同徳医学院教授	同济大学医学院	208	
5	周彦	景文	江蘇			214	
6	金問淇	恂侯	浙江			230	
7	張国元			四川志範医院		284	
8	顧祖仁		江蘇		同济大学医学院	403	

3、ハイデルベルク大学（7名）

1	尤彭熙	人端	江蘇		同济大学医学院	143	
2	朱慶墉	仰高	浙江		医学博士	167	
3	朱亜雄	君俠	江西		南洋医学院	167	
4	呉憶初		浙江			180	
5	周延勛	君常	浙江		同济大学医学院	214	
6	童亜澄	志青	浙江	上海南洋医学院。同徳医 学院教授	同济大学医学院	325	

7	嚴釗	永健	江蘇	上海新場医院長。宝隆医院	上海医学院	399	
---	----	----	----	--------------	-------	-----	--

4、ゲッティンゲン大学 (6名)

1	李賦京		陝西	河南開封省立医学院教授。解剖学		198	
2	沈樹宝	子奇	浙江		同济大学医学院	209	
3	張致果		江蘇			272	
4	張凝	靜吾	河南	河北省立医学院内科	同济大学医学院	281	
5	黃種強	種強	江蘇			330	
6	閻彝銘	仲彝	河南	河南中山大学医科主任	同济大学医学院	382	81

5、ハンブルク大学 (6名)

1	江俊孫				北平大学医学院	172	
2	呉曼青		浙江	上海同德医院、上海肺病療養院医師	女性、同德医学院、医学博士	180	
3	周壽祥			上海中西藥房	同济大学医学院	214	
4	梁俊青	克鑫	広東	上海郵政儲金総局医官	同济大学医学院、医学博士	286	
5	黃昭学		浙江			330	
6	趙啓華	松喬	河北		同济大学医学院	354	

6、フランクフルト大学 (4名)

1	翁之龍	叔泉	江蘇	上海同济大学長	同济大学医学院	263	
2	翁文瀾		蘇江		北洋医学堂 (既に廃止)	263	
3	彭道尊			四川志範医院		319	
4	曾照	耀仲	江蘇		同济大学医学院	320	

7、ミュンヘン大学 (4名)

1	方子勤		浙江			144	
2	朱徳明		浙江	江蘇省立医院		169	
3	費昆年		浙江			326	

4	虞靖	誠之		北平益寿医院	北平大学医学院	348	
---	----	----	--	--------	---------	-----	--

8、ヴェルツブルク大学（3名）

1	丁名全		浙江	上海婦孺産科医院	医学博士	139	
2	狄福晋		江蘇			212	
3	謝祖培	漢欽	浙江	北平大学医学院	浙江省立医薬専科学校	387	

9、チュービンゲン大学（2名）

1	王蘇宇	息廡				150	
2	李通權	伯蘅	熱河	河北省立医学院外科	北平大学医学院、医学博士	201	

10、ロストック大学（2名）

1	李善峻	頌康	浙江		同済大学医学院	192	
2	陳作紀			山東膠濟鐵路四方医院		307	

11、不明（2名）

1	馬馥庭		河北	河北省立医院長	直隸公立医学専門学校、医学博士	266	
2	陳志方		江蘇		女性、同徳医学院	300	

【フランス 21名】

1、パリ大学（7名）

	名前	別号	出身省	住所、診療所	備考 (中国での医学校履歴)	掲載頁	
1	宋国賓	恪三	江蘇	上海中西薬房	震旦大学医学院	189	72
2	洪之琛	彦瑜	江蘇	上海中西薬房		240	
3	孫遠方					252	
4	張友梅		江蘇	上海聖心医院	震旦大学医学院	271	
5	楊士達	輯五			震旦大学医学院	338	
6	羅広庭			広州光華医学院外科		397	
7	龔寒梅	一鶴	江蘇	上海彌撒爾医院	震旦大学医学院	405	

2、ポルドー大学 (6名)

1	王祖徳		浙江		北洋医学堂 (既に廃止)	155	
2	孫玉瓚		河北		北洋医学堂 (既に廃止)	254	
3	張江槎		広東		北洋医学堂 (既に廃止)	284	
4	景恩械		河北		北洋医学堂 (既に廃止)	319	
5	賈富文			河北煤鉍局衛生処		349	
6	蔡鴻	鵠程		南京内政部衛生局防疫司長	北洋医学堂 (既に廃止)	369	71

3、リヨン大学 (4名)

1	江学遜			広東光華医学院附属医院 皮膚科		173	
2	宋梧生		浙江	上海聖心医院医務主任		190	
3	宋杏邨		浙江			190	
4	徐祖鼎	彝頌	浙江	杭州産科医院	北平大学医学院	258	

4、ストラスブール大学 (2名)

1	褚民誼	重行	江蘇			353	36
2	劉永純				震旦大学医学院	360	

5、モンペリエ大学 (1名)

1	張登仁		江蘇			271	
---	-----	--	----	--	--	-----	--

6、ランス大学 (1名)

1	劉翔雲		湖北			361	
---	-----	--	----	--	--	-----	--

【イギリス 20名】

1、エジンバラ大学 (8名)

	名前	別号	出身省	住所、診療所	備考 (中国での医学校履歴、博士号、他国への留学経験)	掲載頁	※
1	王靄頌		広東	上海中国療養院		147	
2	江虎臣		湖北	漢口普愛医院		172	

『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留学歴（2）—欧米留学者を中心に—

3	何致栄					176	
4	周振禹					215	
5	林可勝		福建	北平協和医学院生理系主任教授		225	105
6	許雨階			北平協和医学院助教授		293	
7	陳鴻康			上海上海医院（皮膚科）		298	
8	舒厚仁		浙江			325	

2、ケンブリッジ大学（5名）

1	牛惠霖		江蘇	上海霖生医院院長	聖約翰大学医学院	147	9
2	梁宝鑑		広東			287	
3	陳永漢			上海海港検疫処医官		298	
4	黄雯		広東	上海黄雯療養院。中国療養院		330	
5	伍連徳	星聯	広東	全国海港検疫管理处処長	東京帝大にも留学、医学博士	165	6

3、グラスゴー大学（2名）

1	李宗恩		江蘇	北平協和医学院助教授		199	
2	潘作琴		江西			369	

4、インペリア（皇家）大学（2名）

1	徐叔超			南京中央医院		257	
2	謝応瑞		湖南	上海工部局巡捕医院長		385	54

5、ロンドン大学（1名）

1	孫邦藩		浙江	上海江海関医務処		252	
---	-----	--	----	----------	--	-----	--

6、大学名不明（2名）

1	黄寿彭			広東南海平洲医社		336	
2	楊廷珖			上海金鷹薬房		338	

【オーストリア／ウィーン大学（5名）】

	名前	別号	出身省	住所、診療所	備考 (中国での医学校履歴)	掲載頁	※
1	池載青			広州中山大学第一医院		174	
2	池正		広東			174	
3	周誠澍			国立上海医学院眼科教授		214	
4	章茂林				聖約翰大学医学院	291	
5	鄭河先	公拔	福建		同済大学医学院	375	

【ニュージーランド（英連邦）／カンタベリー大学 3名】

1	王懷樂		広東	夏葛医学院長		158	
2	梁宝暢		広東			287	
3	陳祀邦	新周				299	

【カナダ（英連邦）／ブリティッシュコロンビア大学 1名】

1	伍直海					166	
---	-----	--	--	--	--	-----	--

【スイス／ベルン大学（1名）】

1	孫粹存		浙江	南京華英薬房		251	
---	-----	--	----	--------	--	-----	--

【イタリア／大学名不明（1名）】

1	莊振家					291	
---	-----	--	--	--	--	-----	--

【フィリピン／魯文大学（原史料ママ）2名】

1	王顧寧					149	
2	張漢民					280	

【安南（ベトナム）／ハノイ大学（1名）】

1	胡巽	守謙			広東公立医学専門学校	243	
---	----	----	--	--	------------	-----	--

【「印度支那」（原史料ママ）／大学名不明 2名】

1	呉文肥		雲南	雲南フランス医院医師		188	
2	李魁	丕章	江蘇	雲南陸軍医院長		205	

2 欧米留学者の帰国後の職業

275名の欧米留學⁽¹²⁾経験者の職業を、『綜覧』のデータからまとめると次のようになる(2つの職業が記されていた人はそれぞれ「1」と計上したので、延べ数は279名となった。また人数の後に示した百分比は、実際の人数の275を母数として算出したものである)。

すなわち、医院／病院関係 69名(全体比25%)、医学校関係(教員・附属病院) 63(23%)、政府・官庁関係17(6%)、薬学関係9(4.7%)、軍隊関係4(1.5%)、医学出版関連2(0.7%)、保険会社1(0.4%)、記載なし110名(40%)、であった。

これによれば、医院(病院)関係者と医学校教員および附属病院関係者が、それぞれ4分の1ずつを占めていることがわかる。

「表2」には、欧米留学者の帰国後の職業全体、またアメリカ、ドイツ、イギリス、フランスについての職業別比率を掲げた。さらに筆者が、本雑誌前号で行った日本留學経験者の比率について、それと合わせた比較を試みることにする。

表2 帰国後の職業

	医院 (病院) 関係	医学校・ 附属病 院関係	政府・ 官庁 関係	薬学 関係	軍隊 関係	研究所	諸学校	医学 出版 関係	保険 関係	記載 なし
欧米全体(275名)	25.1%	22.9%	6.2%	4.7%	1.5%	0%	0%	0.7%	0.4%	40.0%
アメリカ(118名)	28.8%	25.4%	7.6%	3.4%	2.5%	0%	0%	0.8%	0.8%	33.9%
ドイツ(100名)	24.0%	25.0%	2.0%	5.0%	0%	0%	0%	0%	0%	32.0%
フランス(21名)	19.0%	9.5%	9.5%	9.5%	0%	0%	0%	0%	0%	52.4%
イギリス(20名)	30.0%	15.0%	20.0%	5.0%	0%	0%	0%	5.0%	0%	25.0%
日本(500名)	42.0%	16.4%	5.2%	4.6%	5.8%	1.6%	0.2%	0.2%	0%	25.6%

ここでは国別の特色を簡単に述べるに止めたい。すなわち、アメリカ留学者は、病院関係29%、医学校関係25%と二つで過半を占め、ドイツ(病院24%、医学校25%)とほぼ同じ傾向であった。ちなみに、日本留學経験者の最多は病院関係で42%、医学校関係は16%であり、医学校関係者の比率は米独の後塵を拝する形になっている。また、母数が少ないため、一般化できないが、イギリス留学者は官庁に務める比率が高い点に特色があるように見える。

さらに、元日本留學生の勤務先のなかで、軍隊(軍医)関係は6%と相対的に少なかったものの、欧米留学者はさらに低く、その半分以下の比率であった。軍事(医学)関連については、日本で学ぶ比率が高かった結果なのかもしれないが、詳細の検討は今後の課題となる。

3 中国における帰国留学生たちの「派閥争い」

ここまで、欧米留学者の具体的な数値（概要）と日本留学者との比較をしてきた。『中華民国医事綜覧』が発刊されたのは、1935年であったが、この前後、同仁会が発刊していた雑誌には、日本留学経験者（「日本派」あるいはドイツ医学を日本で学んだため「日独派」と称された）と欧米留学経験者（「欧米派」と称された）において、「日本派」が「欧米派」の勢力に凌駕されていることを嘆く論説がしばしば掲載されている。

たとえば、1931年2月には、元軍医であった下瀬謙太郎が「上海視察談」として次のような指摘している⁽¹³⁾。長文にわたるが、引用しておきたい（傍線は筆者による）。

日華両国の医師の提携は如何と申しまするに、之は甚だ遺憾な点が多いのであります。米留学者は米国の医師団体と連絡をとって、社交上に於いても、亦学術上に於いても立派な団結が出来て居ります。之は英国仏国ドイツ留学者も亦同様でありまして、各々米派、英派、仏派、独派の団結を形成して居ります。

留日医師の数は随分多いのでありますが、今日まで之に類した団体は無く、上海在留の邦医が五十人有っても、平素何等の連絡がありませんから、留日医師と面識ある者も殆ど無い位であります。此点に於いては常に同文同種を高調する日本よりも、異文異種たる欧米の方が遥にじっくりとっていて、寔に皮肉意外を感じたのであります。

何が故に然るか、今其原因を一々列挙することは出来ませんが、少くとも将来此の点が大いに改まり、日華医界の連絡、中日両医の提携といふことが立派に成立しますならば、我々までも頗る愉快なことだらうと想像されるのであります。（略）

元来日本派は人数に於て一番多いのでありますが、全く背景を持って居らず、後援も無く、連携もありません（略）斯くの如く日本派の不振なる理由の一つは、留日諸君が留学国との連絡を持たぬ為めではないでせうか。と云って之れは決して留日諸君が之を求めない罪ばかりではなく、日本学府全体の責にも帰すべき点がありませう、何れにしても留日諸君が本国に帰へられて後、全く孤立無援の状態にあることは、如何にも残念千万に思はれるのであります。さればとて今俄に日本側から援護とか後援などと言ひ出して反っては異なるものであらうが、英米独仏の如き背景なり、提携なりを考へて見ることは頗る当然の事だらうと思ふのであります。（略）

各国学派と共に上海医界の団体が又夫々分裂して居るやうであります。（略）両派が今日の処全く水と油で、なかなか融和していない、政府の内部に於ても此の両派は互に対立し（略）近年に至り漸く協調の必要が諸処に叫ばれて、何とかして此の両派を接近せしめようとする運動がいくらか台頭して居るやうであります。

下瀬の「観察」は、きわめて興味深い内容を持つ。かいつまんで言えば、海外留学経験者の多数勢力であるはずの「日本派」は、「欧米派」に比して、横の連携がなく、また留学先との交流もきわめて少ないので、それを打破する必要がある、という提言であった。

そもそも同仁会自身は、中国（北京、青島、済南、漢口）に「同仁会医院（病院）」⁽¹⁴⁾を設け、日本人だけでなく、中国人への治療も行なっていた。また、1927年から日本で医薬を学ぶ中国留学生を歓待する「懇話会」を春秋に開催し始め、1931年2月には、中国に興味を持つ日本人医薬学生をも交えた「中日医薬学生談話会」を発展的な形で発足させている。また「談話会」だけでなく、病院や学校、製薬工場の見学、さらに小旅行なども企画し、留学生が日本で多くの学びをできるような企画を行なっている⁽¹⁵⁾。

つまり、同仁会は、留日医薬中国人学生との交流や連携を図る努力はしていたのである。しかし、『同仁』誌上では、下瀬のような指摘がしばしば繰り返されることになる。『医事綜覧』が発刊された1935年にも、次のような記事が掲載されている。

帰国した元留日学生の「現在の状況はどうかと申しますと、久しい間続く排日の関係で、日本に留学した学生は時に多少の消長がありましたが、何れかと云ふと大体において余り得意でない。（略）日本留学出身者であるが為、近頃は比較的振るっていないようです。今日どんな病院に行きましても、また医学校へ行きましても、日本留学出身のお医者様は非常に少ない」云々⁽¹⁶⁾。

ここに見るように、「久しい間続く排日の関係」が根本的な問題で、ともかくも「振るっていない」と関係者が嘆く現状があった。そうした状況下の1937年6月、それらを修復しようとする意図を持って、東京帝大名誉教授・永井潜⁽¹⁷⁾が、北平大学医学院名誉教授に就任し、三回に分けた集中講義を行うこととなる。『同仁』誌には、永井の訪問について、「最近俄かに日支関係が逼迫して、中国の一部では対日開戦論まで持ち上がっているこの時、日支外交の瘤とされる北支へ科学の使徒として赴く博士には、同時に“平和の使節”とも期待されるわけである」⁽¹⁸⁾との礼賛が掲載されていた。

ところが、永井が一回目の講義を終え、北京を離れたその日（7月7日）に盧溝橋事件が勃発したため、二回目以降の講義は中止になってしまう。永井はその年の『同仁』12月号に、「北京滞在中の所感」を寄せた。そこで、永井は北京大学での講義の感想のほか、義和団賠償金によるアメリカ、イギリスの教育支援と日本のその比較も展開しているが、その中で1902年から活動を始めている同仁会が引き合いに出されている。

永井いわく、同仁会は「日本の医学進出のために苦心して居るもので、病院を作り、医学薬学の著書の紹介をすると共に、留学生の面倒を見る等のことをして居るのであります。然し、此の機関の最も華々しかったのは、過去のものの様に思ひます。其れは後になって北京の協和医学院や済南の齊魯医学院の如き大きな機関が出来たために、此のものの有難みが薄らいだ様な感があります」云々⁽¹⁹⁾。

つまり、永井は同仁会の営為自体は評価するものの、北京にアメリカ系の医学校（協和医学院）などが出来たため、「過去の遺物」になりつつあると苦言を呈する。そして、それを克服するためには、同仁会が中国での病院経営にさらに力を注ぐことのほか、「医育機関」の設置が必要と主張するのであった。

永井の提言が載った翌号（1938年1月号）には、開戦から半年ということもあり、今後

の日中関係を改善するための方策が複数掲載された。たとえば、飯島茂⁽²⁰⁾は元医学留学生の連携について問題提起をしている。いわく、アメリカ留学経験者は「ロックフェラー病院（筆者注一協和医院）を中心として、連絡統制が能く取れて居る故、其の人数が少ない割合に勢力が強大であると聞いた」。それに対し、十年ほど前に北京に行った時、「日本留学出身の民国医人は、相互間の連絡交通が疎である。交通しても居らぬ。（略一各大学の）出身者が、各濠を深くし壁を高くして独立独行である。従って、其の勢力は各人個々の勢力たるに過ぎぬ」云々。

ここで言うアメリカ系の協和医院と日本の同仁会医院との比較は、『同仁』誌で何度も語られていく。たとえば、協和医院のそばに建つ「同仁会北平医院」の現状はきわめて遺憾で、「物的要素に於ては全く現今の我邦の医学を代表するに足らぬもの」との手厳しい批判も確認できるほどであった⁽²¹⁾。

さて、中国に戻った留学生たちが留学先の影響を受け、対立しているという言説を側面から検討するため、帰国後に医学校に勤務した人たちの動向を整理しておきたい。すなわち、「後継者養成機関」であるところの医学校教員（となった元留学生たち）の影響力が強いであろうと考えるが故である。もちろん元医薬留学生たちの中国社会における評価については、留学していた国からの継続的な支援など、様々な観点から検討する必要がある。しかし、ここでは、帰国後に就職した中国の医学校名を、元日本留学生の勤務先と対比することに留めたい。

まず欧米留学経験者で、中国の医学校教員等になった者は、63名であったが、その勤務先の一覧は以下である（ここでは延べ人数としたため、総数は64名になっている。また下に挙げた日本留学者も務めていた学校には下線を引いている）。

北平協和医学院（19名）、国立上海医学院（7）、河北省立医学院（5）、広東光華医学院（5）、上海東南医学院（4）、浙江省立医薬専科学学校（3）、山東省立医学専科学学校（3）、上海同德医学院（2）南通学院医科（2）、広東中山大学医学院（2）、広州夏葛医学院（2）、北平大学医学院（1）、上海滬江大学（1）、上海南洋医学院（1）、上海女子医学院（1）、上海聖約翰大学（1）、上海同济大学（1）、長沙湘雅医学院（1）、済南齊魯大学（1）、河南省立医学院（1）、河南中山大学（1）。

筆者が旧稿でまとめた日本留学者（82名）の医学校勤務先は以下の通りである（欧米留学者（上記）も勤めていた医学校については下線を引いている）。

江西省立医学専科学学校（14名）、浙江省立医薬専科学学校（12）、国立北平大学医学院（7）、国立中山大学医学院（7）、上海東南医学院（6）、山西川至医学専科学学校（6）、河北省立医学院（4）、広東光華医学院（3）南通学院医科（3）、広西省立医学専科学学校（2）、河南省立大学医学院（2）、四川省立医学専科学学校（2）、清華大学（1）、保定省立医学院（1）、南京中央大学（1）、国立上海医学院（1）、上海中法大学（1）、江蘇省立医政学院（1）、青島大学（1）、山東省立医学専科学学校（1）、江西省立助産婦学校（1）、広州育慈助産学校（1）、広州濟生助産学校（1）。

ここで、まず注目されるのは、「協和医学院」への就職者が19名もいて、欧米留学生63名中の30%にも及ぶことである。その19名のうち、アメリカ留学生は15名、イギリス3名、ドイツ1名の比率となっていて、アメリカ留学生の牙城と例えるにふさわしい状況であった。その意味で、『同仁』誌が協和医院（協和医学院）を脅威とみていたのは、あながち間違いではなかったのである。

ちなみに、日本留学生が最も多く勤務していた医学校である「江西省立医学専科学校」には、このデータ上では欧米留学経験者が一人もいなかった⁽²²⁾。一方「協和医学院」には、日本留学生が一人もいなかった。しかし、日本留学生が教員の多数派を占めていた浙江医専、上海東南医学院⁽²³⁾には「欧米派」も存在している。

つまり、『綜覧』のデータのみから言えば、「両派が存在していたという傾向」を指摘することはできるが、明確な「派閥」が学校別にあったのか否かは、他の史料も照らし、慎重に検討する必要があるだろう。

とは言え、『同仁』誌上では、留学先別の派閥が存在する旨の言説が存在したことをいくつか紹介した。そこで、改めて欧米留学経験者の「医学校」勤務者63名の内訳を示せば、アメリカ留学生30名、ドイツ26名、イギリス3名、フランス2名、オーストリア2名、ニュージーランド1名であった。

一方、「医院（病院）」勤務者69名の留学経験は、アメリカ34名、ドイツ24名、イギリス6名、フランス4名、安南（ベトナム）1名であった。それぞれの勤務先医院名はここでは割愛するが、なぜか「協和医院」の勤務者は一人もいなかった。医学校勤務者が付属病院に大なり小なり関わることは一般的と思われる。それを考えれば、アメリカ留学生で協和病院に関わった人士が、『医事綜覧』に見えるデータではゼロになっている理由は不明であるが、これも今後の課題とせざるを得ない。

おわりに

筆者が旧稿（5号所載）で説明した『綜覧』の史料的な性格（問題点）については、本稿でも再度触れておきたい。すなわち、この『綜覧』は、1934年ころの調査であるため、その時点で「回答」があった職業を掲載しているものと推測される。したがって、「帰国留学生のその前後の活動（履歴）」をすべて網羅している訳ではないという点には留意すべきである。さらに『綜覧』の「住所・診療所」の項目に、「住所」しか書かれていない人（また全く無記載の人）が相当数にのぼることをどう解釈するかも難しい問題である。あえて申告しなかった人もいるだろうが、それ以外に「その時点で、医業を退き無職であった」という解釈、また個人で開業医をしているため住所しか書いていないとの可能性も排除できない。さらに、この調査段階で物故していた医師は、そもそも『綜覧』の「医師名録」には含まれていないと考えるのが妥当であろう。

さらに言えば、『綜覧』の諸データは、「現職」はもとより、留学先についても、基本的

には「自己申告」であったと思われ、複数の国に留学していても、すべてをあげていない事例もあるはずである。つまり、この『綜覧』が、貴重な史料であることは間違いないが、不明な点もかなり残ることも、また事実なのである。それを正すためには、他の史料を突き合わせた検討を根気強く行っていくほかない。

なお、それを検証（修正）する可能性を持つ史料の一つに、1929年から30年にまとめられた「中華民国医界名士録」のデータ⁽²⁴⁾がある。この史料は、1934年ころのデータである『綜覧』の記載内容との間に、時間的な齟齬が存在する。しかし一方で、情報量がかなり多い「名士録」からは、『綜覧』との違いを見て取ることができる。一例をあげれば、「褚民誼」の留学先は『綜覧』で、フランス・ストラスブール大学となっているが、「名士録」では、パリ医学校となっている。それ以外の差異について、逐次の指摘は省くが、「名士録」の留学先や職業遍歴などが『綜覧』と異なるケースも少なくない。よって、別稿でまとめたデータの一部を、「表3」として参考までに掲げておきたい（本稿の表1の最後に照応する番号を入れている）。

表3 『医事綜覧』と「中華民国医界名士録」にともに掲載されている人たち

	名前	字	出身	現任	学歴	留学先	経歴	元論文での通し番号
1	牛惠生		江蘇省上海県	上海医学協会会長。	上海聖約翰（セントジョーンズ）大学文学碩士（1919）、アメリカハーバード大学医学博士（1914）。	アメリカ	上海ハーバード医学校教授（1915）、アメリカハーバード大学医学校細菌学教授、アメリカジョンボブキンス病院整形外科助手（1918）、北京医学専門学校整形外科主任（1920）、北京医学協会秘書、国立医学協会書記（1921）。	10
2	陳輝	光甫	浙江省上虞県	陸軍軍医学校附属医院上校医務主任兼同校病理学系主任教官	天津北洋軍医学校第一期畢、ハーバード大学研究熱帯病学博士学位	アメリカ	陸軍第三師軍医官、防疫局検査官、紅十字会医官、浙江民政司衛生課課長、陸軍学校衛生教官、国立医科大学細菌学公使、陸軍学校衛生教官、衛戍司令部医務処科長。	56
3	陳宗賢		湖北省武昌県	衛生部中央防疫處處長、兼技術科科長	武昌文華大学畢理学士、アメリカハーバード大学畢医学博士。	アメリカ	北平協和医学校細菌学教授、アメリカコロンビア大学細菌学教授	86
4	劉瑞恒	月如	河北省天津	国民政府衛生部常務部長	天津北洋大学畢、米国ハーバード畢、医学博士（1915）	アメリカ	ハーバード医学校助手、上海紅十字会総病院医員、北京協和医学校助教授、医科部長	1
5	謝元甫		広東省中山県	北平協和医学校泌尿科医	武昌文華大学畢医学碩士（1910）、上海聖約翰（セントジョーンズ）大学畢、上海中国ハーバード大学畢医学博士。	アメリカ	ハーバード医学研究院研究（1927）、ブルックリン大学病院泌尿科医、ニューヨーク麦爾謬病院医師（1919）、北京協和医学校助手（1920）、北京陸軍部顧問医、西北辺防軍顧問医、北京病院院長（1927）	24

『中華民国医事綜覧』から見る近代中国の医学者と留學歷（2）—欧米留学者を中心に—

6	全紹清	希伯	河北省宛平県	天津特別市衛生局長	天津北洋大学畢、アメリカ・ジョンボプキンス大学、ハーバード大学留学、医学博士（1912）。	アメリカ	北洋医学教授（1907）、東三省ベスト防疫委員（1910）、陸軍軍医監、陸軍軍医学学校校長（1914）、教育部次長（1922）、青島衛生局長（1924）、北京紅十字病院監事（1926）。	5
7	胡宣明		福建省龍溪県	鉄道部衛生処処長、衛生部中央衛生委員会委員	聖約翰（セントジョーンズ）大学畢（文学士、1910）、アメリカジョンボプキンス大学医学畢医学博士（1915）、ハーバード大学マサセッチュー工科大学校合辦衛生官専門学校畢（1916）、第二次留美研究衛生行政（1925～28）	アメリカ	中華衛生教育会副総幹事兼漢文総編集、学校衛生科主任、広州市衛生局長、内政部衛生司技正、国立中央大学医学院衛生副教授兼吳淞衛生模範区主任、鉄道部技官正	83
8	胡鴻基		江蘇省無錫	上海特別市衛生局長	北京国立医学専門学校畢。アメリカ・ジョンボプキンス大学公共衛生学博士。	アメリカ	アメリカ・テネシー州衛生部行政官、青島普濟醫院主任委員、松滬商埠衛生局副局長	7
9	梅貽琳		河北省天津	南京市衛生局長	シカゴ大学医学博士、ロンドン熱帯病学研究院医学博士、米ジョンボプキンス大学公共衛生学博士、フランス・パスツール研究所研究微生物学、ニューヨーク伝染病医院研究防疫	アメリカ、イギリス、フランス	中央防疫処技師兼科長、衛生部簡任技正、国立中央大学医学院衛生系主任教授、吳淞衛生模範区主任、中華衛生教育会会長	103
10	黄子方	子方	福建省	国民政府衛生部参議（1929）	アメリカコロンビア大学畢	アメリカ	北京中央防疫処医師、漢口特別市衛生局長（1917）、北平特別市衛生局長（1928）	39
11	王福滙	注東	山東省		上海同濟大学医科畢、ドイツベルリン大学畢（医学博士）	ドイツ	済南中西医院院長、青島膠澳埠督辦署総医官、青島普濟病院院長	11
12	李允恪		山西省万泉県	天津市立医院長兼外科主任	ドイツベルリン大学畢、同付属医院研究、医学博士	ドイツ	山西省太原並州大学医学院外科主任教授、陸軍第三方面軍総司令部参議、天津市政府衛生顧問	100
13	汪元臣	善甫	江蘇省儀徵県	江蘇省立医院長、江蘇省保安処衛生顧問、鎮江県医師公会執行委員会常務委員主席	ドイツベルリン大学畢（1927）、医学博士	ドイツ	江蘇省民政庁技正、同警官学校及区長訓練処医務主任、江蘇省立医院医務長兼外科主任、上海同徳医学専門学校教授、同同徳産科学校教授、同南洋医科大学教授	101
14	江聖鈞	秉甫	浙江省奉化県	杭州龍興路（開業）	大阪医科大学畢（1916）、ベルリン大学医学博士	日本、ドイツ	浙江伝染病院院長、浙江省立医薬専門学校教授（1923）	12
15	朱其輝	内光	浙江省紹興	浙江医薬専門学校長	千葉医専畢（1914）、ドイツベルリン大学医学博士（1920）	日本、ドイツ	南京第八師軍医長、北京医科大学内科主任（1917～25）	28
16	吳濟時	谷宜	江蘇省宜興県	蘇州公園路9号（開業）	京都府立医大（1912）、ドイツベルリン大学医学博士	日本、ドイツ	南京江蘇省立医院医長	18

17	閻彝銘		河南省浙川県	中山大学医科教授、河南教育廠学校衛生検査会委員	国立同済大学医科畢、河南省赴ドイツ実習並考察医学ドイツ。ゲッティンゲン大学医学博士。	ドイツ	上海実隆委員医師、ドイツ歌庭根大学外科医師、ベルリン大学産婦科助手、国民政府軍医監理委員会後方重傷医院上校医官兼主任、杭川市立病院外科主任兼皮膚花柳科主任、首都第二陸軍医院医務主任。	81
18	宋国賓	恪三	江蘇省江都県	上海震旦大学医科教授、上海安当医院主任医師、上海職業指導所健康導師、新医与社会編集主任、医業評論編集。	上海震旦大学畢。フランスパリ・パスツール学院畢	フランス	上海医師公会主任、上海特別市衛生局西医試験委員。	72
19	蔡鴻	鶴程	江西省南昌県	衛生部防疫司司長	天津海軍軍医学校畢、フランス ボルドー大学医学博士、パリ大学癌学院証書。	フランス	前直隸省派往呉橋等処防疫、フランスAchen聖加客医院医師、上海聖心医院医師。	71
20	褚民誼		浙江省	国民党中央執行委員会委員、医業評論編集主任、東南医科大学上海女子医学専門学校主席校医董蕤蕤	(日本大学法学科)、浙江省立法政学校畢、パリ医学学校畢	フランス (日本)	浙江省議会議員、広東政府中央執行委員、中央特別委員会候補委員 (1927)、中央党部商民委員 (1927)、国民政府監察院委員、上海中法大学校長	36
21	林可勝		福建省吾環県 厦門	北平協和医学院生理学系主任教授、中国生理学雑誌編集主任	イギリス・エディンバラ大学畢	イギリス	エディンバラ大学医科組織学講師 (1917~23)、中華医学会会長	105
22	牛惠霖		江蘇省	上海中国紅十字会総医院長、上海山東路病院顧問医、衛生教育執行委員会会長、上海聖約翰 (セントジョーンズ) 大学教授兼校医。	上海聖約翰 (セントジョーンズ) 大学畢、ケンブリッジ大学およびロンドン病院留學生 (医学博士)。英国王立医師会委員。	イギリス	中華医学会会長、同上海分会長。	9
23	伍連徳	星聯	広東省台山県	国民政府軍政部陸軍署軍医司長、	英国ケンブリッジ大学畢 (同文学士、医学博士)、香港大学法律士、上海聖約翰 (セントジョーンズ) 大学博士、東京帝大医学博士。	イギリス、日本	北洋医学校校長、營口海口檢疫医院院長、北京中央医院長、中華医学会会長、東方文化事業上海分会委員、大總統府侍從医官、第一回中日交換教授 (1923:九州帝大、京都帝大、東京帝大講演)	6
24	謝応瑞		湖南省衡陽県	上海南京路開業、東方文化事業上海委員会委員 (1925年以降)	ロンドン皇家大学畢	イギリス		54

ここに見えるような齟齬を正していくためには、たとえば人名辞典などを含めた他の史料による精査が必要となるだろう (『名士録』を扱った旧稿では、現代中国で発刊された4つの人名辞典の記載と照す作業をしている)。しかし、『綜覧』掲載のデータを整理することを第一義とする本稿では、他の史料と照らしての検証は他日を期すこととしたい。

本稿では、元日本留学者が中国に戻ってから、相互連携がなく、また留学先である日本との提携が少ないことを『同仁』誌への寄稿者が、嘆くことを紹介してきた。しかし、『綜覧』史料から得られる「事実」としては、民国期に中国で医学に関わっていた元留学経験者の三分の二が、日本留学経験者であったことは変わるものではない。また日本医学界と中国医学界を繋ぐために、同仁会がそれなりの「努力」してきたことも間違いのないことだ

ろう。

しかしながら、1931年の満州事変、また1937年の日中戦争勃発⁽²⁵⁾により、同仁会は本来の目的を果たせぬままで敗戦を迎える。のみならず、日中戦争中に日本軍に協力した事実などにより、戦後、同仁会は解散せしめられることになるのである。

そのような運命をたどる同仁会であるが、同会が展開した医薬留学生支援や帰国した医学者への対応がすべて無意味であったかは、また別問題と筆者は考えたい。近代の日中関係で同仁会が果たした役割について、すべて忘却し、歴史の彼方に葬るのではなく、歴史的な意味を多義的に考えていくために、精緻な検討を加えていく必要はあるだろう。本稿はそれを進めるための基礎作業の一つである。

[付記] 本研究は、2020～22年度JSPS科研費基盤C・一般（20K02508）「1930～40年代日本における中国人留学生教育」の助成を受けた成果である。

注

- 1 同書は、国立国会図書館に所蔵されており、現在では「デジタルライブラリー」から、全ページをネット上で閲覧することができる。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1050143>
同書の構成は、「叙言」、「目次」に続き、①「中国新医学之発達」（全体の概要説明：全4頁）、②「中国医事行政法規」（全63頁）、③「中国医事行政機関」（全3頁）、④「中国医学教育機関」（全4頁）、⑤「中国医院名録」（全61頁）、⑥「中国医師名録」（全270頁）、⑦「中国主要都市の医師分布」（全1頁）、⑧「中国薬房名録」（全49頁）、⑨「中国医学文献及刊物一覧」（全9頁）、⑩「医薬学書目」（全8頁）、⑪「新医薬学定期刊行物一覧」（全3頁）の順番に収められており、1930年代半ばの中国の医学全体がまさに総覧できる書籍となっている。
- 2 拙稿を収めた『千葉大学国際教養学研究』第5号（2021年3月）は、千葉大学附属図書館のリポジトリに登録されているため、論文タイトルをネット検索すれば、PDF版を簡単に閲覧することができる。
- 3 『綜覧』は、「中国医師名録」を示す前に、「凡例」を掲げ、留学先の学校名の中国語表記が原語の何に当たるかを示している。たとえば「美国（アメリカ）」のところに「密及根（米西干）」の表記は「Michigan University」である旨が示されている。一方、「名録」に留学先が「英国 密及根」と明記されている人が三名いる。当初、筆者は「英国」表記を優先して、この3名を、前号では「イギリス」範疇に入れた（しかも旧稿では「ミシガン」ではなく、なぜか「コロンビア」との誤記している）。しかし、イギリスに「ミシガン大学」はないと思われるので、「美国」範疇に入れ直すことにした。
- 4 前回はアメリカの総計を114名としたが、「ハーバード18」が1名増、また「ミシガン11」が3名増となったため、総計118名に正した。
- 5 ドイツは前稿における誤りがきわめて多かった。「ベルリン63」を56に、「ハイデルベルク8」を7、「フライブルク6」を8、「チュービンゲン3」を2、「フランクフルト3」を4、「ミュンヘン2」を4、「ヴェルツブルク1」を3、「不明」を0から2に、それぞれ修正した。なお合計の100名は変わらなかった。
- 6 フランスは、「パリ9」を7、「ストラスブール1」を2に変更した。また「ランス大学 1」を新たに確認し、追加したが、21名の総数は変わらなかった。

- 7 イギリスは、「エジンバラ12」を8、「ケンブリッジ6」を4、「グラスゴー3」を2へとそれぞれ訂正した。またイギリスに「コロンビア3」を入れたのは私の誤認であり、米国に入れ替えたことは、注3で示した。それらによって、総計が27名から20名に大幅に減ったが、後述のように、英連邦に属する地域の大学を別立てにしたことも、その原因の一つである。
- 8 『綜覧』凡例中の「英国」の中に、「坎達伯」がある。ここには英文表記が付されていない。おそらくこれは「カンタベリー」であり、現在のニュージーランドにある大学のことを指すと思われる。1935年に作成された資料であるが、ニュージーランドが英連邦の一つであることから「英国」と表記したものと考え、別立てした（前号では、カンタベリー大学に関し、「1名」と記したが、2名の遺漏があったため、「3名」と訂正した）。
- 9 「凡例」中の「哥倫比亞」は、「美国」の「Colombia」であると示す。ところが、「英国 哥倫比亞」卒とされる人物が一人いた。上記「カンタベリー」の事例を鑑みて、カナダにある「British Columbia大学」への留学者と判断し、前回設けなかった「カナダ」を新たな項目として立項した。
- 10 留学先が「義国」とだけ書かれた人物が一人いる。前号では、「ベルギー」としたが、中国では「イタリア」を「義太利（意太利）」と表記するため、それはイタリアに訂正した。
- 11 見城「近代中国における医学者の海外留学と帰国後の活動―「中華民国医界名士録」を素材として」『人文研究（千葉大学）』50号、2021年。本稿も、千葉大学附属図書館のリポジトリに登録されているので、論文名をネット検索すると、PDF版としてただちに入手できる。なお、この「名士録」は『同仁会医学雑誌』の1929年7月号から、1930年10月号まで16回にわたり、連載されたものである。
- 12 275名の中に、「安南（ベトナム）」への留学者が1名、「印度支那」が2名いるが、便宜的にこの3名を含んだ275名を、本稿では「欧米留学者」と称することとする。
- 13 下瀬謙太郎「上海医事視察談―上海在留の邦人医師」『同仁』1931年2月号、18～19、23頁。下瀬（1868～1944）は東京帝大大学院を卒業後の1903年陸軍軍事学校教官。退役後の1921年台湾総督府医院医長、1923年関東庁旅順委員長などを歴任している（泉孝英編著『日本近現代医学人名事典』2012年、医学書院、321頁）。
- 14 中国における同仁会医院設立の最初は、北京医院で1914年のことである。続いて、1923年に漢口医院ができた。さらに、青島医院については、元来ドイツが経営していた医院を日本軍が接収し、1925年に同仁会に移管された。また済南は1915年に創設された診療所を、1925年に同仁会の経営としたものである（『同仁会四十年史』1943年）。
- 15 前掲『同仁会四十年史』、183～185頁。また、見城「同仁会による留日医薬留学生の支援」（孫安石・大里浩秋編『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』（東方書店、2022年）では、「中日医薬学生談話会」などの活動を検討した。
- 16 山井格太郎「中国医事見聞談」『同仁』1936年1月号、63頁。
- 17 永井（1876～1957）は生理学者。1915年に東京帝大教授となり、1934～37年は医学部長。退官後、37～39年台北帝大医学部長などを歴任した（前掲、『医学人名事典』431頁）。
- 18 「永井博士の渡支」『同仁』第11巻第5号（1937年5月号）91、95、96頁。
- 19 永井「北京滞在中の所感」『同仁』1937年12月号、15頁。
- 20 飯島「同仁会病院事業に対する卑見」『同仁』1938年1月号、10頁。飯島（1868～1953）は、山梨県出身の軍医。日清日露戦争、さらに第一次世界大戦の青島攻略に従軍。1934年関東軍軍医部長、38年軍医総監。39年軍医学校長などを歴任（前掲、『医学人名事典』30～31頁）。
- 21 佐藤秀三「鮮満支遍歴所感」1937年2月号、10頁。佐藤（1889～1946）は細菌学者。1927年に東京帝大教授となり、1941年には上海自然科学研究所所長も歴任している（前掲、『医学人名事典』292頁）。

- 22 1925年に同校の校長に就いた王子珩は、1905年に来日し、明治大学の商科で学んだ経験を持つが、その後アメリカ留学を果たし、1920年にシカゴ大学で学位を取得している（魏家鳳『江西医学院院史1921-2001』（江西医学院院史委員会、2001年、318頁））。つまり、「欧米派」でもあった王子珩の存在は、『綜覧』の記載から漏れている。こうした事例は他にもあると思われる。
- 23 1935年の外務省史料によれば、浙江医薬専門学校医科の24名の教授のうち、校長を含む19名が日本留学者であった。また、上海東南医学院は、千葉医専留學生が創設した医学校であるため、多くの教員が日本留学経験者であった。本稿では、それぞれの医学校の特質について論ずることはしないが、見城『留學生は近代日本で何を学んだのか』（日本經濟評論社、2009年）では、千葉医専・医大の卒業生が多く勤務していた浙江省立医薬専門学校、北京大学医学院、上海東南医学院、南通医学医科大学、江西省立医学専門学校について、簡単に言及している（71～75頁）。
- 24 注11に同じ。
- 25 筆者は、「日中戦争開戦前後における日本医学界の中国・中国留學生觀—医薬支援団体「同仁会」の機関誌に見える言説から」（『人文研究（千葉大学）』51号、2022年3月）と題する拙稿で、1937年1月から38年2月までの『同仁』誌における特徴的な言説をまとめた。